

2009年6月20日、第21回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が開催されます。協会発足以来はじめて、東京以外での開催となります。プログラムは別紙の通りです。ご出欠のハガキを同封しましたので、5月中の投函をお願いいたします。また季節柄、天候への不安や、過密プログラム、土地勘という点から、お弁当のご用意をお薦めいたします。こちらでも仕出し弁当の申し込みを受け付けております。同封ハガキをご利用ください。今回の Newsletter には、各研究発表、シンポジウム、ワークショップの梗概を掲載しました。

Topics

- ▶ 第21回研究大会
～研究発表要旨、シンポジウム梗概、FWワークショップ梗概～
～懇親会のお知らせ～
- ▶ 事務局からのお知らせとお願い ～口座振込について～
- ▶ コラム：グレノミナ日記（山田久美子）
- ▶ （別紙）大会プログラム・会場のご案内

第21回研究大会 研究発表要旨、シンポジウム梗概、

Finnegans Wake ワークショップ梗概

1. 研究発表要旨（発表順）

（1）第二のサタン

小川 真也

James Joyce (1882-1941) の *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) の主人公 Stephen Dedalus は小説の第4章の最終部で空を飛ぶ姿を見たように思う。この姿は一般的に古代の工匠ダイダロスと考えられる。Stephen のファミリーネームが “Dedalus” であることや、小説のエピグラフに掲げられる言葉がクレタ島のラビュリントスに幽閉され、脱出の方法を考えるダイダロスを描く Ovid の *Metamorphoses* からの引用であることから Stephen がダイダロスを精神上的の父の位置に据える読みが導かれる。

しかし、この空を飛ぶ姿を単純にダイダロスだけと結びつけて良いのだろうか。本発表ではトリエステでの講演から Joyce がダイダロスとサタンを混同している点に注目し、Stephen が精神上的の父の位置にサタンを据えていることを確認し、その理由を考察する。

最初にダイダロスとサタンの類似する要素と Stephen とサタンを結びつける要素を指摘して、

Stephen がダイダロスを精神上的の父の位置に据えているだけではなく、サタンをこの位置に据えていることを確認する。

つづいて Stephen がサタンを精神上的の父の位置に据える理由を考察する。この理由を突き止めるために第5章の夢の場面を取り上げる。この場面はサタンがイヴを誘惑する場面と対応関係にあると考えられる。サタンの場合はアダムとイヴを墮落させることは神の計画を挫くことであった。また、サタンの行動はアダムとイヴを墮落させただけでなく、人類の罪を贖うためにキリストが遣わされる要因にもなっている。

一方、Stephen はカトリック信仰から離れており、サタンに身を窺すことで信仰から離れたことを鮮明にすることが可能となる。また、当時のアイルランドには新しいメシアを希求する気運があった。Stephen 自身、自らをキリストになぞらえる点があるので、彼も新しいメシアを希求していると言える。サタンの行動で引き起こされたことを考えると、Stephen は第二のサタンとしてアイルランドで「幸福なる罪過」を引き起こすためにサタンを精神上的の父の位置に据えていると結論づけられる。

(2) 『ユリシーズ』におけるスティーヴンと反ユダヤ主義

結城 史郎

『若い芸術家の肖像』から『ユリシーズ』にかけて、スティーヴンの意識は大きく変化したと思われる。たとえば、『ユリシーズ』において、スティーヴンは「エピファニー」という芸術観に対して、またその芸術観に固執したかつての「若き」自己に対しても距離を意識している。さらに前作でダイダロスを父と仰いだかつての自己に対しても、イカロスとしての結末をたどったと意識的である。母に憑かれるのもその変化の現れである。作者としての役割についても、不顕の神のような存在から、時代のイデオロギーに刻印されたシェイクスピアのような人物像を展開している。

そのようなスティーヴンにとって、それでは民族の問題はどうなったであろうか。本発表ではその問題を考察するため、ブルームとの関係における彼の反ユダヤ主義の姿勢を検討してみたい。特に疑問として挙げたいのは、第17挿話において、スティーヴンがブルームの家に招かれ、親密な会話を交わした後、ブルームに失望を与えるような反ユダヤ主義の歌を歌って家を辞する場面である。これはスティーヴンとブルームの関係を読み解くうえでもきわめて重要な場面であるが、その背景がこれまで明らかにされてきたとは言えない。Ira B. Nadel (1989) や Neil R. Davison (1996) によるユダヤ人問題についての論考でも、スティーヴンの行動にどのような意図が伏在していたのか、曖昧なままである。スティーヴン自身が反ユダヤ主義のイデオロギーに囚われているのか、それともブルームとの関係を断つための意図によるものであったのか。

まず、ブルームについてスティーヴンがどのような感情を抱くに至ったかを確認したい。マリガンはブルームに対する誹謗、ブルームとの交流、さらにはブルーム自身のユダヤ人観など、スティーヴンに及ぼした一連の流れを考察する必要がある。スティーヴンは、ブルームの家庭において、不可解な状況に追い込まれ、その意識を払拭するために反ユダヤ主義の歌を歌ったとも思われる。

同時に、スティーヴンの反ユダヤ主義に対する姿勢も検討したい。スティーヴンはイギリス人のヘインズの反ユダヤ主義に軽蔑的な視線を向けている。さらにイギリス系アイルランド人のディージー校長との会話においても、その反ユダヤ主義に否定的な姿勢を示している。その一方で、新聞社の人々にモーゼをめぐる批判的な寓話を語り、図書館でのシェイクスピア論ではユダヤ人問題に言及し、ブルームとの交流

ではその身体に対する違和感を示すなど、スティーヴンは反ユダヤ主義的な姿勢を示している。

また、スティーヴンを取り巻く反ユダヤ主義の言説を検討したい。スティーヴンが時代のイデオロギーから自由であるとは言えない。そうであるなら、ユダヤ人をめぐるスティーヴンの意識は、時代の反ユダヤ主義とどのような関連があるのか問われなければならない。可能なら、テキスト内での、またテキスト外での反ユダヤ主義の言説を参照しながら、スティーヴンの意識と比較したい。

(3) 「ナウシカア」挿話における女性性の考察——ガーティの性的な示威行動

武井 研一

『ユリシーズ』の第13挿話の中で、『オデッセイア』のナウシカア姫に擬されているガーティは、暮れ行く海岸を背景にして、彼女を見つめているブルームに対して性的な誘惑行為を行う。本発表では、彼女がそのような行動を取るに至った原因になったであろうモーティヴについて考えてみたい。

まず Platt や Gibson などの『ユリシーズ』に対する近年の政治的なアプローチでは、ガーティは、イギリスの植民地を睥睨させる意図を含んだ幾つかの婦人誌によって、英帝国主義に資する視点を取るように思考を操作され、ひいてはそれらに含有されている読み物等が骨組みとしている、ヴィクトリア朝的な家父長制の雛形を鑄込まれた存在であると見なされている。

この規範は、当時広く読まれていた小説『点灯夫』に典型的に示されている「家庭の天使」の概念と軌を一にするもののはずであるが、そこに描かれたヒロインを「理想」としながらも、ガーティがそれから外れてしまっている存在であることも、研究者たちによってすでに喝破されている。又この挿話のガーティから、「海辺の娘たち」という、男性側に「消費」の欲望を掻き立てる「性的な商品」としての「少女」の面を読み取ろうとする研究も最近とみに進んでいる。

問題のガーティの挑発行為はまず、この「家庭の天使」像から彼女が決定的に逸脱したことを明示するものであると同時に、彼女が男たちに熱望される「海辺の娘たち」の役割をその極端なレベルにおいて表現したものと解釈されうるものであろう。

本発表では、ガーティの行為をブルームが望み招きよせた妄想であるという見方は取らずに、生身の人間としてのガーティの思考の流れに焦点を合わせてさらに論を進めて行きたい。すなわち思春期の少女の典型であるとともに、ナウシカアに擬せられる特別な存在でもあるガーティがどのような状況下で、そして彼女の抱えていると思しきどのようなディレンマから件の行為をするに至ったのかについて考えてみたい。

そのためには、作品の舞台である時代に、ハンディキャップを持った人間が直面せざるをえなかった社会的な問題の考察が必要であろう。そして上記の諸雑誌が彼女にとって教化的なものではなく、むしろ彼女の自我を過酷な現実から守ってくれるシェルターであるという見方を取るならば、彼女の身体的な障害と外見に関するナルシステックなプライドとの補完的な関係も導き出せるに違いないのである。

(4) ダブリン市民は東洋に何を見るか

山田 幸代

Joyce は東洋 (the Orient) に関する表象の数々を、実に丁寧かつ慎重にその作品に書き込んでいる。そして『ユリシーズ』においてそれらは決して直接的な描写ではなく、登場人物たちの意識の中で断片的かつ間接的に呈示されることが多い。例えば、第1挿話と第4挿話では Stephen と Bloom がともに朝のダブリ

ンで *Turko the Terrible* に思いを馳せる。当時ダブリンで人気を博していたこの英国のクリスマス・パントマイムは、それぞれ異なる文脈の中で無意識に共有されている。ここからも Orientalism という文化的現象が、英国を通じて当時のダブリン市民たちの意識にも少なからず影響を与えていたという事実が読み取れる。

さらに東洋に関する表象が特に集中して登場する第 15 挿話は、オリエンタリズムにおける東洋のイメージがいかに劇場と結びついた (theatrical) 創作的なものであったかということ、さらに様々な文学作品の記述を介する間テクスト的なものであったかということをも物語っている。そして次々と変わる登場人物とその衣装が示しているように、東洋のイメージは定まることなく、むしろその意味は拡大していく。それはまさに Edward W. Said が指摘した、帝国主義の権力構造を背景とするヨーロッパ的なオリエンタリズムの表出と読めることは言うまでもない。だが同時にブルームの個人的な幻想が舞台の台本形式で描かれているこの挿話には、西洋文化が作り上げた東洋のイメージに対する、彼特有の姿勢が反映されてもいる。そしてその姿勢は、第 18 挿話における Molly の独白にも表れている。

本発表では『ユリシーズ』に描かれている東洋に関する表象を *Turko the Terrible* を皮切りにいくつか取り上げ、登場人物たちにとっての東洋のイメージの特徴とその理由について考察してみたい。

(5) Paul Gregan's poetry and its possible influence on Joyce's *Chamber Music*

Martin Connolly

In this paper, I seek to shed some light on neglected Irish poet Paul Gregan (1875-1945), and upon the suggestion, made by Richard Ellmann, that his poetry may have influenced Joyce in the composition of the final lyric of *Chamber Music*. Gregan was closely associated with George 'AE' Russell and the Theosophical movement in Dublin. He published only one volume of verse, *Sunset Town and Other Poems*, in 1901, and, as Stanislaus Joyce relates (*My Brother's Keeper*, p.149), his brother James appears to have been impressed. Joyce sent off a copy of Gregan's book, together with some poems by himself and others he liked, to the eminent critic William Archer in 1901 for possible inclusion in an up-coming anthology of young talent. At this time, Joyce was in the very early stages of writing what would become *Chamber Music*.

Richard Ellmann has suggested (in *James Joyce*, footnotes to pp. 81 & 121) that the final poem from *Sunset Town*, entitled 'Recreant', may have had actual direct influence upon the final lyric in *Chamber Music*, XXXVI, 'I hear an army...'. It is, however, a suggestion which has remained until now completely unexplored, perhaps indicating a general lack of interest in *Chamber Music* as well as a conspicuous modern neglect of Paul Gregan (who, post-1909, was not anthologized). This paper, then, is the first in-depth presentation and consideration of Ellmann's claim. I will not, however, restrict myself to testing its accuracy: the Gregan element, I believe, allows us to uncover previously unseen aspects to what has become one of Joyce's most enigmatic lyrics. It is hoped that this exploration of possible influence may also re-ignite interest in and debate over *Chamber Music*.

As a corollary, I hope we will be able to glimpse something of the very early Joyce. Although he was to later pillory the Dublin Theosophists, Joyce in 1901 shared much of the excitement and the idealism, and even interest in Theosophy, of a poet such as Gregan.

(Gregan's volume is not readily available: this study is based on transcriptions I made of *Sunset Town* at The British Library and The National Library of Ireland.)

Works cited: Stanislaus Joyce, *My Brother's Keeper* (London, Faber & Faber, 1958).

Richard Ellmann, *James Joyce* (Oxford, Oxford University press, revised ed. 1983).

2. シンポジウム ～ *A Portrait of the Artist as a Young Man* 再読 ～

コーディネーター 戸田 勉

『若い芸術家の肖像』（以下『肖像』と略す）は、『ダブリン市民』と『ユリシーズ』の間の重要な時期に書かれ、モダニズム小説として、あるいは教養（芸術家）小説としても高く評価されている。しかしながら、これまでの日本ジェイムズ・ジョイス協会の大会において、シンポジウムのテーマとして取り上げられたことは一度もなく、研究発表でも直接扱ったものは極めて少なかったように思われる。シンポジウムについては、『ユリシーズ』や『フィネガンズウェイク』といった大作の考察を優先したことが大きな要因であったとしても、この現象はきわめて奇妙である。

この理由のひとつは、半自伝的な小説として『肖像』が内包する特異性にあると考えられる。つまり、肖像に描かれた芸術家と肖像を描いた芸術家との距離の測り難さ、あるいは、ジョイスがステイーヴンの人物造形に込めたアイロニーの濃淡の解釈がこの小説の批評には常に付きまとい、読み手を幻惑するためである。『肖像』は好き嫌いのはっきりする小説であるとよく言われるのもこの特質と無関係ではないだろう（近年の『ステイーヴン・ヒアロー』の翻訳と『肖像』の新訳の出版はこの対極の現象と思われる）。

本シンポジウムでは、まず、長い間『肖像』批評の焦点となっているジョイスとステイーヴンの距離について整理し、その後で、教養小説の系譜やモダニズム的視点、さらには当時の文化的なコンテクストからこの小説を捉え直し、新たな魅力を引き出したいと考える。

「英国教養小説の視点」

中尾 真理

19世紀から20世紀にかけての英国小説の主流の一つに教養小説というジャンルがあり、『肖像』もその系譜につらなるものと考えられる。そこで、本発表では英国教養小説と比較をしながら、アイルランドの若き作家ジョイスの自伝風小説『肖像』を読み、その独自性を考えてみたい。

教養小説の主人公には、その人間形成の過程において、普通「父親の試練」「恋愛（＝女性）の試練」「経済的試練」の3つの試練が降りかかるが、ステイーヴンの場合、父親、女、金は絶対的に対立する存在ではなく、試練としてそれほど深刻には受け取れない。

また、多くの教養小説の主人公たち同様、ステイーヴンも周囲から孤立するが、彼の場合、家族、社会から孤立するだけでなく、祖国アイルランドからも孤立している。しかしながら、祖国はいつもステイーヴンの中に意識されており、彼はアイルランドの現状を憂えてそれを変えたいと思っている。そのために彼はむしろ進んで、家族、友人たちから「孤立」しているが、彼の心の慰めは、「夢」に耽ることである。

時代的にはモダニズムに属する作家として、『肖像』の表現形式の新しさにも注目したい。第5章末

をのぞいて、『肖像』は三人称小説だが、全知の語り手の介在（＝説明）なしに、スティーヴンの意識の断片をつないでいく形を取っている。スティーヴンの感覚を通して語られるので、言葉には彼の意識の高揚に合わせたリズムがあり、そのリズムは語りのレベルにはとどまらず、章ごとの展開にも感じられる。若きジョイスの作家としてのアポロジヤにも触れてみたい。

「モダーンの痕跡」

金井 嘉彦

文学作品は、単に作家内部に生まれた物語がそのままの形で現れるのではない。作家が生きる時代と社会に即した、その場所と時間だからこそ必要とされる形に鋳直されなくてはならない。それは、「モダーン」の時代に生き、またアイルランドに生きた作家にとっては、より切実に感じられる要請であったはずだ。

実際モダニズムを代表する作家の一人と誰しもが認めるジョイスの場合、その要請は『ユリシーズ』、『フィネガンズ・ウェイク』という形を帯びて現れてくる。その実験的表現形式は、作家ジョイスの中に、自らを取り巻き、この先社会が向かうモダンな世界に、対応しなくてはならないという意識が強くあったことを示している。その意識は『ユリシーズ』よりも前の作品にはどのような形で現れているのか。むしろ写実的な作品と見なされる『ダブリナーズ』においても、「モダーン」の息吹とそれによる高揚感が感じられるならば、『フィネガンズ・ウェイク』から『ダブリナーズ』に至るベクトルの中で、いわば中間的な位置にある『肖像』の場合にはどうか。それを確認しておくことも必要であろう。本発表では、ジョイスが意識していた「モダーン」が『肖像』の中にどのような痕跡を残しているかを探る。

「『肖像』のセクシュアリティ」

吉田 宏予

抑圧と解放をテーマに、『ユリシーズ』の前段階として『肖像』を読み、当時のセクシュアリティの変遷を踏まえながら考察する。

ジョイスの時代には、文学という位置づけに置かれた作品が検閲を受けていた一方で、猥本を含む大衆的な雑誌や本などが入手可能な時代となり、セクシュアリティは狭義の生物学的目的から、消費文明に不可欠で限りない可能性を秘めた商品価値を生み出す目的へと変化していく。また、生殖の対象から歓喜の対象になり得るという性的解放は女性の解放と連動しているという点で重要である。

本発表では、スティーヴンのナルシシズムとブルームのマゾヒズムとを比較することは元より、芸術と官能の狭間を浮遊するスティーヴンについての描写に注目して考察していきたい。

3. *Finnegans Wake* ワークショップ ～「ホスティーのバラッド」を読む～

横内 一雄（兼司会）、妻鹿 裕子、小田井 勝彦

『フィネガンズ・ウェイク』第1部第2章末尾にある通称「ホスティーのバラッド」と呼ばれる部分は、生成の上でも物語の上でも早い段階に位置し、比較的読み易いようにも見える。しかし、読み易いといっ

でもそれは見かけ上のことで、実際には作者の意図を把握できているはずもなく、また一見すらすら読めるのはきっと何かを読み落としているからに違いない。われわれはこの読み易そうな箇所実際にどの程度まで迫っているのか、また迫っていけるのか。それを測定する試みとして、今回のワークショップを活用したい。

まず、この箇所を理解するために必要な基礎知識を整理するために、『ウエイク』全体の中での位置付けや、生成過程を知るための手続きを概観したあと、テキストを素直に読んでみる。いかに読み易いといっても、そこには語形や意味のずらしなど、小技がいろいろ効いている。そうした小技の中から、いくつかの側面を拡大して議論していけば、面白くなるのではないかと思う。バラッド形式をとっていることの意味、北欧モチーフの意義、出てくる固有名詞の正体、隠れたテーマ、それから先行研究で言及されてきた歴史的含意など、大きな枠組みであるHCEの物語に回収・接続できるものもあれば、そうできずに逃走・迷走していく線もあろう。これらのテーマのいくつかを、小田井、妻鹿、横内（司会兼）の三人の発表者がそれぞれの観点から取り上げてみたい。

とは言え、個人的には、ワークショップは研究発表ではないと考えている。時間は限られているが、われわれ発表者が見落とした点があれば、どんどんフロアから補っていただいて、もう何も出ないというところまで皆で煮詰めて初めて、この箇所が読めたとか読めないとか言うことができるものと思う。積極的な参加（乱入？）を期待したい。

（文責・横内一雄）

懇親会のお知らせ

18:30からは懇親会が予定されています。会場は、京都府立大学そばの「京都コンサートホール」（地下鉄烏丸線北山駅おりてすぐ）一階のレストラン、*Bistro La Muse* となります。

京都コンサートホール ホームページ	http://www.kyoto-ongeibun.jp/kyotoconcerthall/
La Muse の「ぐるなび」情報	http://r.gnavi.co.jp/k002704/

懇親会費は、フリードリンク込みで、5000円とさせていただきます。事前にお振込みください。例年以上に多くの方々のご参加を期待しております。

事務局からのお知らせとお願い

～口座振込について～

* 日本ジェイムズ・ジョイス協会の会費 5000円（学生会員の場合 3500円）、および懇親会費 5000円や弁当代金 1000円は、安全のため、従来通りすべて「振込」とさせていただきます。（会場ではお受けできません。） 下記「ゆうちょ銀行」の口座へお振込みください。

* 通信費節約のため、通常領収証はお送りしていませんが、必要な方には、研究大会当日の受付にてお渡しできるよう用意いたします。その場でお申し付けください。（ただし大会直前ですと口座の確認ができませんので、できれば5月中のお振込みをお願いいたします。）また研究大会・御欠席の方には、後日送付する Joycean Japan に同封させて頂きます。

* 領収証をお急ぎの場合、その旨、同封の出欠ハガキの備考欄にお書き添えください。事務局にてお振込みの確認が済み次第郵送いたします。

* 誠に恐れ入りますが、振込手数料は会員の皆様にご負担頂いております。ただし「ゆうちょ銀行」または「郵便局」に総合口座をお持ちの方で、ご自分の口座から直接 ATM を使って振替にされる場合、9月30日までは手数料無料、とのことです。この方法でもお受けいたしますので、口座をお持ちの方はどうぞご利用ください。

* 同封の青い用紙（電信払込み請求書）をご利用の場合、お名前・送金額等必要事項を御記入のうえ、お近くのゆうちょ銀行または郵便局にてお支払い願います。手数料が525円もかかる実情、前々から気になってはいるのですが、どうか御理解のほどお願い申し上げます。〔たとえば日本英文学会等で用いられている「赤い払込用紙」の場合、振込人側の手数料は無料なのですが、口座入金額から手数料が自動的に引き落とされるというシステムになっております。そのためでしょうか、日本英文学会は、ゆうちょ銀行に口座を作ることを勧め、さらに自動振替も勧めているようです。〕

* 上記のように手数料がかかりますので、同封の用紙をお使いの場合、「会費」、「弁当代金」、「懇親会費」は、すべてこの1枚で御送金頂いて構いません。同封の出欠ハガキに振込額選択欄を設けましたので、こちらにも念のためご記入ください。〔会費のみ：5000円（学生会員 3500円）、会費＋弁当代金：6000円（学生会員 4500円）、会費＋懇親会費：10000円（学生会員 8500円）、会費＋弁当代金＋懇親会費：11000円（学生会員 9500円）。なお、学生会員から一般会員になられた方、その他変更等ございましたら、その旨ハガキの備考欄でお知らせください。〕

* お勤め先の大学によっては、研究費で学会費を支払う場合、払込用紙（もしくはその支払い領収証部分）をそのまま事務所に提出するシステムも見られます。「会費だけなら可能だが、懇親会費や弁当代金は研究費から出せない」、そのため「用紙は同封の1枚では足りない」という場合、誠に恐れ入りますが、ゆうちょ銀行または郵便局に備え付けの同じ用紙（「記号が1から始まる口座用」）に、別途必要事項を御記入のうえ、御送金ください。（この場合、お勤め先の負担でないところに手数料がかかってしまいますが。）ご不便をおかけして申し訳ございませんが、会費値上げの回避策、何卒御理解と御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

~~~~~

## 山田 久美子

2008年9月から研究休暇を利用して University College Dublin, School of English で学生生活を送ることになった。重いスーツケースを押してキャンパスに到着、寮費振込書を見せてカードキーを受け取り、六部屋ごとに台所と居間が共用の学生寮 Glenomena の住人となる。この発端は遅まきながら博士論文を書きたいと、Anne Fogarty 教授に打診したところ丁寧な返事をもらったことだろうか。ちょうど PhD. プログラムが新しくなり、UCD James Joyce Research Centre が開設されたところでもあった。3年から5年かけて8万語前後の論文を書くという目標に向けての第一歩である。

翌日、文学部一階の Arts Café でオランダ人留学生の Rosalinde に会う。一年間同じ授業を受ける MA の学生に比べて孤立しがちな PhD からの新生には相談相手が必要と、教授との連絡の取り方、図書館の利用法、日用品の買い物など細かく教えてくれ有難い。月曜日には Declan Kiberd 教授の比較文学 MA のゼミ *Ulysses and World Literature* に出席。水曜日午後は英文科の Research Seminar で、教授、客員研究員、PhD 学生などの研究発表を聞き、質疑応答の後 Faculty Common Room に移動して歓談する。

研究計画を Doctoral Panel の担当教員である Fogarty, Kiberd 両教授に見てもらい、関連資料等のアドバイスを受ける。UCD 図書館、TCD 図書館、Clongowes Wood College Archive, Archbishop Marsh' s Library などをまわり、合間にダブリンの街を歩く。週末には林完枝ゼミ出身の岡添倫子さんはじめ、寮の留学生仲間で食事に招きあい、芝居やパブにも出かけた。彼らはよく勉強するが、休日にはフットワーク軽く欧米英にでかける。

UCD James Joyce Research Centre の Public Lecture Series では、Reading *Ulysses: Revisiting Joyce' s Dramatis Personae* の題で John McCourt, Valérie Bénéjam が順次講演。12月には *Dublin James Joyce Journal* が創刊され、国立図書館で Declan Kiberd による記念講演があり、ジョイス博物館の Robert Nicholson はじめ学内外の人たちが集まった。

ジョイスの誕生日前後に開催の James Joyce Graduate Conference、第2回の今年はローマ第3大学を会場にUCDの3名を含む25名余の研究発表、Richard Brown, Fritz Senn, Anne Fogarty, Sam Slote による講演、パブでの前夜祭、アイルランド大使公邸でのレセプションと、イタリアのジョイス研究の伝統と自負がうかがえるものであった。81歳になるという Fritz Senn の Why is There Still So Much to Do? という講演には勇気付けられた。途中抜け出して Irish College in Rome を訪ねた。

2月21日にはワークショップで *Finnegans Wake* Book III. 1. 冒頭部分を読む Wake-end 2009 がある。Anne Fogarty, Sam Slote, Luca Crispi に加えて Moderator として Finn Fordham と Wim Van Mierlo が招かれ、俳優の Paul O' Hanrahan が朗読、チャペリゾッドのパブにも行くらしい。3月には帰国して仕事に復帰するが、秋の Transfer Assessment に向けて書く1万語をどのようにするか、寮の青い芝生に積もった雪を眺めながら思いめぐらす今日この頃である。(2009年2月9日記)

~~~~~

事務局情報

住所変更をされて
この Newsletter が
転送で届いた方
は、お手数ですが
右記事務局宛にお
知らせください。
(e-mail 可)



日本ジェイムズ・ジョイス協会 事務局

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

群馬大学教育学部

吉川信研究室内

メールアドレス: sean_jjsj_since08june(at)ybb.ne.jp

ゆうちょ銀行 口座番号: 記号 10430 番号 1854541

(名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会)